
博士の恋心

迅雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

博士の恋心

【Nコード】

N9631H

【作者名】

迅雷

【あらすじ】

助手の桐原君は大きな荷物を床に置いて、溜め息を吐き出した

。人の気持ち分からない博士と、助手の桐原君を描いた短編。

(前書き)

博士とその助手の桐原君を描いた短編。ラブストーリー…になる予定でした

助手の桐原君は大きな荷物を床に置いて、溜め息を吐き出した。

「行動には事情がつきものでしょう。だから訊きます。どうしてこんなものを？」

密閉の研究室に声が響いた。好奇心旺盛なことは科学者の必須条件だよねと考えながら、私は助手の桐原君に言葉を返す。中身のないマグカップが根拠もないのにカタンと倒れる音がした。

「過去の過ちを直したいからだよ」

「過ち……」

「当時、私には好きな子がいてね」

「好きな子がいたんですか!？」

「黙ってなさい」

「はい、博士」

「好きだと告白したらね、『藤田は何も分かってないよ。確かに頭も良いし、運動もできるし、ルックスも良い、ウルトラハイパーデラックス超人間かもしないけど、藤田は相手の気持ちになって考えることができないから私は嫌い』って言うてきてね。あれ以来結構なトラウマなんだよ」

夏の太陽の下で

「好きです」とクラスの子に告白したあの時以来、好きになるとい

う概念を世界のどこかに捨ててしまったかもしれない。当然私には妻もいないし、恋人もいない。ただいつも、助手の桐原君が隣にいるだけだ。

小学生の頃の私は、大人を鼻で笑って自分の理論を述べるような憎たらしい子供だった。憎まれ口を叩く性格が幸いしてなのか、いったい何度、母親から嫌な目で見られたことか。

友達と呼べる人なんて、周りには一人もいなかった。馬鹿な子供とは友達になる必要がないから、と自分で思っていた。何とも可愛げのないガキであった。でも、そんな私に好きな子ができたということはある意味人生最大の汚点である。まあ酷い言葉で返されて、もの見事に振られたわけではあったのだが。

思い返せば懐かしいが、果たして現在はどうだろう。あの頃から変わったのは、私の周りの景色と取り囲む人だけかもしれない。

「博士！ ついにできましたね」

桐原君のくぐもった声を聞き、急に現実に戻された。桐原君は目から溢れる涙を拭って鼻をすする。この施設にティッシュペーパーの設備はないので（私はそれがずっと前から不満だった）、白衣の袖で涙と鼻水を拭いている。

研究室の中央にはサッカーボール程の球体がある。桐原君はそれをゆっくり持ち上げた。

「ついにタイムマシンが完成しましたね！」

助手の桐原君は泣き笑いを私に見せた。

作り笑顔と嘘泣きが素晴らしく上手だと巷で有名な桐原君は、ポーカーフェイスという単語を知らないのだろう。桐原君は良い助手だ。人当たりが良く、周囲から好かれる性格でいらっしやる。私にはないものを持っていた。その事を嫉妬した時はないのだけど羨ましいと思うことはある。私はあんな性格だから周りから疎まれやすい。

私の思考はいつの間にか、助手のことではいっばいだった。歴史的発明をした興奮はどこに消えたのか。また、世界のどこかに捨ててきたのだろうか。

「ああ……ようやく完成したな」

軽く頷いて、私は助手の桐原君と共に、前方にある丸い物体を見つめた。数秒間隔で紅いランプが点滅を繰り返している。今すぐにもタイムトラベルできることを示していた。そういう設計にしているのだ。

「とりあえず嘘泣きは止めようね」

いつまでも泣いてちゃ駄目ですよと、私は釘を刺した。助手の桐原君は私に微笑みかけて、

「嘘泣きなんかじゃありません」

と言いながら直ぐに泣く動作を止めた。やはり嘘泣きじゃないか。私と桐原君は長い付き合いであるから、分かることも多々あるのだ。

「博士、嬉し泣きつて言葉知らないでしょ」

「桐原君、人間が嬉しい時に泣くわけがないだろ」

「ですね。ただの確認です」

「ふむ。では行こうか」

「はい」

「良い返事だ」

そうして我々はタイムトラベルを開始した。

目的地は、私がまだ生意気なガキのころの時代である。

「着いたな」

草原に私は立っている。草花が相当珍しいのか、助手の桐原君は不思議そうに周りを見回した。スキありと思い、タイムマシンをその手から奪うと

「ああ！」と叫んで私を睨む。

「いきなり何するんですか！」

「いつまでも君に持たせて置けないだろ」

「私が持ってちゃ駄目ですか」

どうせ私はバカですよ、と助手の桐原君は怒っているのか落ち込

んでいるのか分からない返事をした。

依然として睨む助手の桐原君に、球を掲げてなるべく意地悪く笑ってみせる。

「君に持たせたままだと男が廃るから、と今は言っておこうか？」

どうやら助手の桐原君は機嫌を直すどころか、ますます不機嫌になつたようだ。

「なんで疑問符が付いてるんですか」

「前言撤回のチャンスを、ぎぶみー」

「棒読み…！ あげませんよ！」

私は草原歩く。気がついたことはここは草原などではなく、校庭の芝生の上ということだ。

夏の太陽が容赦なく照りつけている。私があの子に告白したのはこんな空模様の時だった。私にとっての歴史的瞬間は刻一刻と迫っていた。下手をすれば間に合わないかもしれない。

「桐原君、急ぎなさい」

「博士がいきなり走り出すから驚いちゃいました」

校庭の隅。あ、もしかしたらここかなと思った瞬間に一人の少女が私の前に躍り出た。可愛いリボンをした女の子である。名前は赤

羽 香奈子。好きな子の名前を忘れるわけがない。少女は私には目も暮れずに走り去った。

「博士、来る時間を間違えました？」

「いいや、これでいいんだよ」

私の視線の先には少年がいる。紛れもなく、少年は過去の私だった。

告白に失敗した少年は呆然と立ち尽くすだけである。端から見ればなんと哀れで、なんと間抜けな姿だろう。私は笑いそうになるのを堪える。

「ふむ……やはりか。私は落ち込んでいたのか」

「博士。タイムリミットです」

再び瞳を開けた時、そこは研究室だった。テーブルの上にはマグカップが倒れていた。タイムトラベルの時間はごく僅かというのは研究の数値で既に出ていた。驚くようなことではない。

助手の桐原君の凜とした声が響く。

「何が何だかわかりません」

博士は何がしたかったんです、と助手の桐原君は首を傾げる。

「要するに、辛い過去も端から見れば滑稽な笑い話に変えることができるのだよ」

「ユーモラスですね」

「論文にはできないがね」

私は倒れていたマグカップを置き直した。そういえば、これは助手の桐原君の使用物である。私のマグカップとお揃いなのは、もしかしたら桐原君の陰謀なのかもしれない。色違い二匹のフクロウが同じような木にとまり、同じように首を傾げていた。

「私も告白をしましょうか。博士、実は私は赤羽 香奈子の娘です」

遠くからマグカップが倒れる音が聞こえる。ああ、私の手元からだった。

赤羽 香奈子は私が20歳の時に俗に言うできちゃった結婚で輝かしい人生の絶頂期を迎えた。しかしながら、名字を旦那と同じ桐原に変えたということは聞いていない。

「昨日で君は20歳になったんだろ、いい大人が冗談を言うんじゃない」

「母は博士のことをこれっぽっちも気にしていませんでした。でも、私は博士のことが気になります」

「嘘を…つくな」

「行動には常に理由が付きまといます。恋では、行動の理由にはありませんか？」

彼女は真剣だった。長い付き合いでこれほど真剣な眼差しを見るのは初めて言っても過言ではない。人に告白するとき、誰もがこれほど真剣になるのだろうか。だとしたら、私がガキの時もこんなに真剣な様子で言ったのか。

助手の桐原君は良い助手だ。用意周到で、頭の回転も速い女性だ。一瞬の気の迷いで愛の告白などするわけがない。桐原君は私のタイムトラベルが成功してもしなくても、これを言うつもりだったはず。長い付き合いだから、たぶんそう。

要は、助手の桐原君が赤羽 香奈子の代わりに名乗り出た。冗談じゃない。40歳の大人と20歳の子供とでは、恋愛なんかになるわけがない。

それに、私が愛していたのは赤羽 香奈子であって助手の桐原君ではないのである。たとえ桐原君が赤羽 香奈子の子供であったとしても、私が愛していたのは赤羽 香奈子だけなのだ。

「たぶん、博士と結婚できる女性なんて私ぐらいですよ」

助手の桐原君の言葉が悪魔の甘い誘惑のように思えてきた。誰でもいいから彼女の口を塞いでくれ。私をこれ以上悩ませるな。

気分が悪くなって、思わず手を付いたテーブルにはコーヒーを入れるカップが二つだけ。ペアのマグカップ。色違いフクロウが二匹だけ。やはり桐原君は用意周到な女性だ。

「桐原君。君の狙いは何だ？ 金か、地位か、権力か？」

「……全部です。ていうか、博士の奇天烈な性格に惹かれました」

「君は赤羽 香奈子と良く似ているよ」

特に顔とかと呟いて、まあ良いだろうと私は思う。桐原君がそれを望むなら妥協してあげようではないか。娘が自分の同級生と結婚することを知ったら、赤羽 香奈子はいたいどんな顔をするだろう。

理性の箍が外れる一歩前に、私の見た桐原君の笑顔は幸せそうな笑顔。何でそんなに嬉しそうなのか、残念ながら私には理解できない。人の気持ち分からない者ですから。私に対する愛の深さはいたいどの位ですか。浅いのですか、深いのですか。

私の恋人は赤羽 香奈子の娘だと最後まで赤羽 香奈子の名前を気にする私は、振られた瞬間から少しも成長していない。愛する気持ちは世界のどこかに捨てた。だけど、一人だけ例外は存在し続けていたんだろう。

研究室には二人きり。桐原君は私の手を掴んでにこりと笑う。ここには余り人が来ないうえ、防音設備は完璧である。桐原君は十分にそれを承知している。しかしいくら彼女に似ているとはいっても襲うのは駄目だと、私の理性は何とか我慢するということを知っていた。

(後書き)

博士と助手の恋愛ラブストーリー…にするはずでした。しかしながら、桐原ちゃんが何故か凄く腹黒い子になってしまった。桐原ちゃんは一途すぎたんですよ。博士を手に入れるためには手段は選ばないということです。むしろこれ、短編にするより長編にした方が良かったと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9631h/>

博士の恋心

2010年10月11日15時23分発行